

2018年度 早稲田大学大学院文学研究科 入学試験問題
【修士課程】 専門科目 現代文学 コース ※解答は別紙（縦・横書）

I. 共通問題

次の文中の下線部「さまざまな劇的構成」の変更について、自分の関心のある領域（演劇も含む）から具体例をあげて自由に論ぜよ。

*解答用紙Iに、全員必ず解答すること。

劇は、観客に見せるものだが、見せるとは、観客の目に見えるようにすることである。〈芝居らしさ〉というイメージを見てみればわかる。〈芝居らしさ〉とは、大仰さや、それらしさや、もりあがりといったものを指している。劇はそれを捨てられない。見えるようにせずにはいられないのだ。

微風より嵐、ささやきより叫びが〈劇的〉なのである。そちらの方が指さしやすいし、見えやすいということだ。〈見える〉ものを見せる、そして〈見える〉ようにして見せる。そのために劇は、よく見なくては見えないものより、見えやすいものへ関心を傾斜させることになる。

〈劇的〉なるものとは、そういうものであり、そういうものでありつづけている。タデウシュ・カントールはそれをつぎのように要約している。

——愛、嫉妬、情欲、情念、強欲、狡猾、臆病、殺害、復讐、自殺、戦争、ヒロイズム、恐怖、苦悩……芸術と演劇は、長い間、文学的プロット、出来事の劇的展開、局面の急転、葛藤、感動的な大団円を基礎として、このような価値ある爆発性の素材を用いてきた。

（『死の演劇』）

つまり劇は、「愛、嫉妬、苦悩……」といった「価値ある爆発性の素材」を、「文学的プロット、出来事の劇的展開、局面の急転……」といった「基礎（作法）」によってつくられてきたというわけだ。短く言いかえると、〈劇的素材〉を〈劇的作法〉によってつくられてきた。〈見えるもの〉を〈見えるように〉してきたのである。

劇には分厚い力がある、劇はその分厚い力に支配されると言ったのは、この構成の力、〈劇的素材〉を〈劇的作法〉によってという〈劇的構成〉の力に支配的なものがあり、不可避免的にその構成に従って〈劇的〉になるということである。

この〈劇的構成〉は、現代に生きて感じているわたしたちの生の感触とどうしてもズレるところがありはしないか。それを意識した劇は、これまでもさまざまな〈劇的構成〉の変更を試みてきた。

（太田省吾『劇の希望』筑摩書房）

II. 選択問題 次のII-1～II-4の中から1題選択し、解答せよ。

*解答文の冒頭には、設問番号（例：II-2）を明記すること。

II-1

次の文章を読んで、「文学と笑い」について具体的な作品をあげて論ぜよ。

「…」わたしが、「文学における笑い」あるいは「文学と笑い」の両方を避けた理由は、まず、前者の場合、明らかに「笑い」は「文学」よりも小さなものに限定されて考えられているからである。それは笑いを、文学の中の一要素と考える考え方であり、後者の場合も同様だろう。[…]

それに対して、「文学あるいは笑い」は、文学を考えることはすなわち笑いを考えることであり、笑いについて考えてゆけばすなわち文学について考えることになってしまう、という意味である。わたしがいいたいのは、要するに文学と笑いの結びつきだ。笑いは、文学の部分であると同時に、それなしには文学全体を考えることが不可能であるという意味においては、文学が笑いの部分であるということもできるという論理である。「文学あるいは笑い」ということばをもって、わたしは文学と笑いの、そのような形における結びつきをいいあらわしたかったわけだ。

もちろん断るまでもなく、それは最初の一行からのべつ幕なしに笑い続ける文学、ということではない。そういう小説も世の中にはあるであろう。ありとあらゆる笑いのタネをそこいらじゅうからかき集めてきて、最初から最後まで読者を笑い転げさせるような才能の持ち主も、決していないとは断言できない。

しかし、わたしがここで考えようとしているのは、そのような才能、およびそのような才能によって書かれた小説についてではない。そうではなくて、笑いの中に世界全体を、人間の存在そのものを、すっぽりと捉えてしまっている文学である。

手品使いがシルクハットから次々に何かを取り出すように、次から次へと新しい笑いのタネを取り出して見せるような小説ではなく、笑いそのものが、世界全体を、人間そのものを捉える構造となっている場合の文学である。そのような文学は、決して、笑いを単なるエピソードとしては扱っていない。たとえ形は、ひとつのエピソードのように見える場合においても、そのエピソードそのものが、世界および人間の存在を捉える、〈構造〉となっていることに気づかなければならない。

（後藤明生『笑いの方法』）

II-2

次の文章を参考に、「声」について論ぜよ。

※この問題は、著作権の関係により掲載ができません。

Ⅱ-3

1966年に発表された次の文章を参考に、今日のメディア状況について具体的に論ぜよ。

※この問題は、著作権の関係により掲載できません。

(M・マクルーハン / E・カーペンター『マクルーハン理論』大前正臣、後藤和彦訳)

※Web公開にあたり、著作権者の要請により出典追記しております。
(原著) Herbert Marshall McLuhan, (ed.) Stanley T. Donnor,
Television in a New Light, The Meaning of Commercial
Television, University of Texas Press, 1967.
Used with the permission of the Estate of Marshal McLuhan.

II-4

次の文章をあなたの言葉で要約したうえで、それを踏まえ、翻訳とはどのような行為であるかを具体的に論ぜよ。

翻訳についての言説を紡ぎ出すということは、まさに錯綜そのものを生じさせることにほかならない。錯綜についての言説のなかに翻訳それ自体が忍び込むからである。もっとも直接的にこれが生じるのは、おそらく翻訳についての言説が、翻訳を翻訳しなければならないときであろう。翻訳を翻訳するとは、翻訳という語を他の語に置き換え、解き明かし、説明するということである。翻訳という語が—「語」というものを事象そのものからも意味からも区別するという常識的な理解に従うならば—それ自体、ある広範で複雑な歴史によって媒介された翻訳語であるという事実については、あらためて指摘するまでもない。しかしこの歴史は、たんに、あらかじめ[翻訳という語の]不変の意味が存在し、それが次から次へと異なる言語の異なる語彙で言い表されながらも、最初の意味が保存され続けるという具合に形作られた歴史ではない。翻訳という語の意味論的な領域は、この語の翻訳と密接に関連して変化し続けているのである。しかしながら、問題はそれだけにはとどまらない。より決定的な問題は、翻訳という語とその翻訳とが、根本的に言語の形而上学的規定そのものと結びついており、また、ギリシアという起源以来の—その起源に由来する—言語の形而上学的規定の発展と結びついているという点にある。翻訳という語を言葉として発するや、我々はすでに翻訳の歴史を繰り返しているのであり、我々自身が語ろうとすることを、翻訳の歴史という媒介変数の範囲内に組み込んでいるのである。

（ジョン・サリス『翻訳について』西山達也訳）

III. 以下の1～15の設問項目から5項目選び、それぞれについて200W以内で説明せよ。

*記入は順不同でもよいが、設問項目番号は、解答欄左上の空欄に必ず明記すること。

- | | |
|------------------|---------------------|
| 1 『政治少年死す』 | 9 ツェラン |
| 2 『月に吠える』 | 10 津島佑子 |
| 3 『グラマトロジーについて』 | 11 大逆事件 |
| 4 『作者を探す六人の登場人物』 | 12 ポスト・トゥルース |
| 5 『キタ・セクスアリス』 | 13 「人間の欲望は他者の欲望である」 |
| 6 バフチン | 14 伏字 |
| 7 南方熊楠 | 15 携帯小説 |
| 8 山田風太郎 | |

受験 番号	
氏 名	

この欄以外に受験番号氏名を書かないこと。

現代文芸コース (I)

総 点

I ——ここから記入すること——

Blank lined area for writing.

(次頁へ続く)

———これより先の余白には絶対に記入しないこと———

受験番号	
氏名	

この欄以外に受験番号氏名を書かないこと。

現代文芸コース（Ⅱ）

総点

Ⅱ ———ここから記入すること———

Blank area for writing answers.

(次頁へ続く)

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——

This image shows a full page of blank graph paper. The grid consists of small, uniform squares formed by thin black lines. There are approximately 20 columns and 20 rows of squares across the entire page. The margins are consistent on all sides.[illegible]

[illegible]

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——